

ビール麦限定契約品種「関東二条2号」について

増田澄夫・中山保・川口数美
 山野昌敏・北条良夫・斉藤忠男

I 緒 言

わが国においてビール麦の栽培が始められて以来、その品種はゴールデンメロン系およびスワンハルス系が中心であったが、これらの品種はいずれも熟期がきわめて遅く、稈が高いため栽培上の立場からは不利で、この点の改良を目的とした育種が醸造会社の手ではじめられ、戦前に博多2号、戦後に向陽が育成された。しかし、博多2号および向陽とも熟期および強稈性の点ではまだ難点があった。

当场ではこれらの点を改良しようと1954年以来早生・強稈・良質を目標に育種をすすめてきたが、1961年配付した関東二条1号はこの点を満足するものであったため、1965年(昭和40年)に二条大麦農林1号として登録、ニューゴールデンと命名され、栃木、群馬、長野、茨城などの各県において奨励品種に採用された。

関東二条2号はそれと同時期に配付されたものであるが、関東東山地域では栽培特性がニューゴールデンとほぼ同様であったため、あらためて品種として採用されなかった。

しかし、近畿、山陽地域ではニューゴールデンより熟期が早まり、栽培特性もむしろすぐれ各県で良い成績が得られ、とくに、兵庫、滋賀、広島などの3県で新品種として有望視するようになった。

ところでビール麦はすべて醸造会社と契約栽培され、その契約種としての採否は、現在、3カ年間、少量製麦試験を行ない、また、必要に

応じて大量醸造試験を行ない、その結果によって決定することになっている。

しかし、この取きめはごく最近決定されたもので、ニューゴールデン、関東二条2号を配付した当時は、すべて大量醸造試験の結果によることになっており、ニューゴールデンはこの方式によって契約品種に認定されている。

関東二条2号についても、同様な大量醸造試験が企てられたが、有望視した県のみでは材料が不足し、実現されなかった。この結果少量製麦試験では良好な成績が得られていたにもかかわらず、正式な契約品種とはならず、結局、兵庫県、滋賀県、広島県でそれぞれ契約指定品種以外の品種(いわゆるその他品種…正式契約種より加算金が安い)として醸造会社と契約して栽培を続けた。その結果栽培面積も増加し、兵庫県では1969年に認定品種に採用した。

その後、このような形で数年間実際醸造に供された結果従来の契約品種と醸造特性のかわらないことが明らかとなり、醸造会社は1969年に兵庫県で関東二条2号を限定契約品種(栽培地域限定、買入れ価格等取扱いは正式契約品種と同じ)として認めることとなった。

現在、麦作面積の全般的な減少、その後の育成種の普及などによって、関東二条2号の作付面積は減少しつつあるが、この系統の配付当初、現在のような契約品種の決定方式が確立していたならば、当然、新品種として農林登録され、

*現農林省農事試験場

**現栃木県農業教育センター

***現農林省農業技術研究所

****現栃木県庁

普及もさらに広範にわたったものと考えられる。

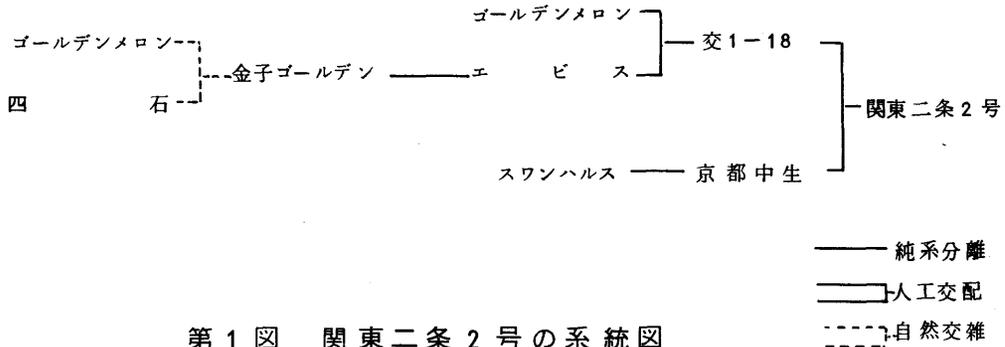
以下、この品種の育成経過、特性の概要、適応地帯などについて報告し、大方の参考に供したい。

なお、本限定契約品種の育成にあたり、系統を移譲された麦酒酒造組合ならびに地域適応性および特性検定に御協力いただいた関係都府県農試に対し、深甚な謝意を表する。

II 育成経過

交配～F₁世代：1951年(昭和26年)春、日本・朝日麦酒株式会社編成の大麦研究班によって「交1-18」を母とし「京都中生」を父として人工交配が行なわれた。

育種目標はゴールデンメロン系あるいはスワンハルス系品種の早生短稈化にあり、母本はこれらの品種より稈の短いものが用いられている。



第1図 関東二条2号の系統図

第2表 育成経過一覽表

年次	世代	供試		選抜		試験場所	備考
		系統群数	系統数	系統数	個体数		
1950(昭25)	交配				50	日本朝日大麦研究班(成城)	
1951(昭26)	F ₁				50	"	
1952(昭27)	F ₂				2000	"	
1953(昭28)	F ₃			100	—	"	
1954(昭29)	F ₄	{2}	19	19	—	栃木県農試南河内分場(南河内)	
1955(昭30)	F ₅	—	19	4	20	"	
1956(昭31)	F ₆	4	20	4	20	"	
1957(昭32)	F ₇	4	20	4	20	"	薬系28命名
1958(昭33)	F ₈	4	20	4	25	"	
1959(昭34)	F ₉	4	25	5	30	"	
1960(昭35)	F ₁₀	5	30	5	31	"	
1961(昭36)	F ₁₁	5	31	3	15	"	関東二条2号命名
1962(昭37)	F ₁₂	3	15	1	5	"	
1963(昭38)	F ₁₃	1	5	1	10	"	
1964(昭39)	F ₁₄	1	10	2	10	"	
1965(昭40)	F ₁₅	2	10	6	30	"	
1966(昭41)	F ₁₆	6	30	6	30	"	
1967(昭42)	F ₁₇	6	30	3	15	"	
1968(昭43)	F ₁₈	3	15	—	—	"	

すなわち、交1-18の稈長はゴールデンメロン系およびスワンハルス系にくらべて約30cm低い。また、熟期はスワンハルス系よりわずかに早い程度であるが、ゴールデンメロン系より1週間早い早生である。

F₁世代以後F₃世代までは日本麦酒株式会社のも成城大麦試験地圃場において同班によって養成選抜が行なわれた。すなわち、F₁では50個体が

栽植養成され、F₂では2000個体が栽培され、早生・短稈の100個体が選抜された。

F₃では100系統の栽植系統中分離の少ない早生・短稈2系統19個体が選ばれた。この種子は個体毎に折半され、一部は同班のもとで一部は栃木県農業試験場薬師寺分場(現南河内分場)に移譲されて育成が続けられた。

F₄世代以後 1954年(昭和29年)秋、移譲

第1表 両親の特性

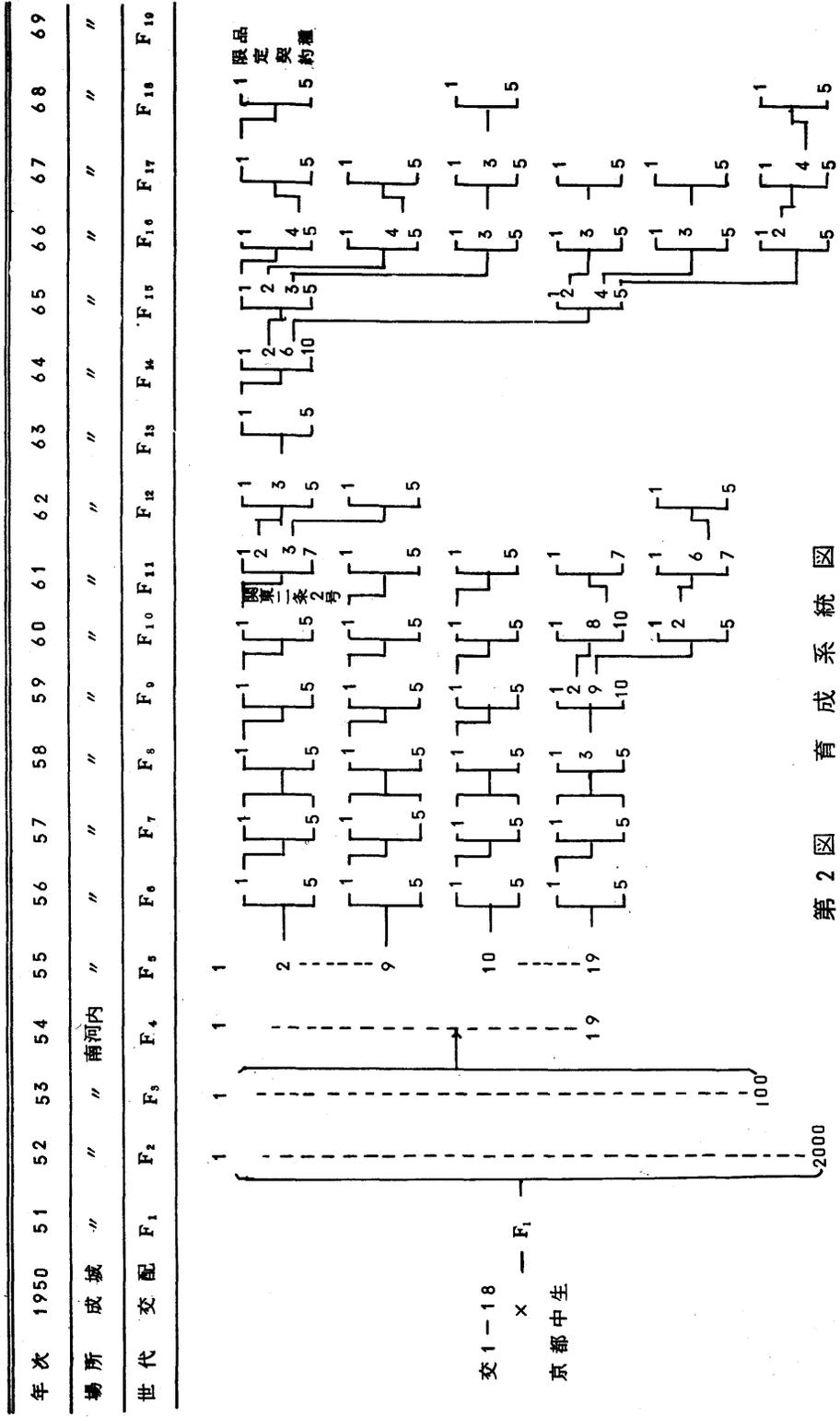
品 種 名	出穂期 (月日)	成熟期 (月日)	稈長 (cm)	叢性	穂型	穂の 下垂度	葉鞘の 着色	葉耳の 着色	芒色	芒の 開閉	芒の 粗滑	葉鞘の 蠟質物	葉の 広狭	株の 開閉
交1-18	4.26	6.1	84	中間	矢羽根	直	中	中	濃	開	やや粗	多	中	中
京都中生	4.30	6.2	109	中間	矢羽根	やや垂	やや濃	やや濃	やや濃	やや閉	やや粗	極多	中	やや開

注. '59~'63年に調査

第3表 関東二条2号の特性(1)

品 種 名	年 次	出穂期 (月日)	成熟期 (月日)	稈 長 (cm)	穂 長 (cm)	m ² 当穂数 (本)	ℓ 重 (g)	千粒重 (g)	倒 伏 程 度
関東二条2号	1958	4.22	5.31	96	6.5	308	716	43.5	一
	1959	4.30	6.8	105	6.9	504	667	39.7	ム
	1960	4.24	5.30	91	6.5	358	639	41.0	ム
	1961	4.26	5.31	96	6.0	586	659	36.2	中
	1962	4.29	6.8	93	7.0	420	621	40.1	中
	1963	4.23	6.2	95	6.3	400	681	45.9	一
	1964	5.9	6.15	85	6.2	484	643	37.1	ム
	1965	4.28	6.6	100	7.0	418	667	40.6	ム
	1966	4.30	6.5	—	—	—	669	41.8	一
	1967	4.28	6.9	94	—	318	711	44.5	一
	1968	4.27	6.2	89	5.9	418	654	33.4	ム
	平均	4.27	6.5	94	6.5	421	666	40.3	
栃木ゴールデン メロン	1958	4.30	6.5	117	6.8	323	711	44.8	一
	1959	5.5	6.12	133	7.1	508	588	30.4	多
	1960	5.4	6.2	113	7.3	360	636	37.8	ム
	1961	5.3	6.5	119	6.6	556	633	33.7	甚
	1962	5.8	6.13	125	7.3	497	565	32.2	甚
	1963	5.2	6.5	115	6.9	400	675	44.5	一
	1964	5.17	6.18	107	6.4	518	615	33.6	少
	1965	5.5	6.12	116	7.1	493	662	39.2	ム
	1966	5.4	6.7	—	—	—	662	38.3	一
	1967	5.5	6.13	112	—	354	717	43.1	一
	1968	5.3	6.4	93	6.2	414	642	34.9	ム
	平均	5.5	6.9	115	6.9	442	646	37.5	

注. 標準栽培における成績である



第2図 育成系統図

された前記系統は薬師寺分場圃場にF₂系統群19系統として栽植された。これらの系統間の変異はさほど大きくはなく、選抜が困難であったので全系統から1個体ずつが選抜された。

F₃世代においてはこれらの系統中より比較的熟期の早い短稈の4系統が選ばれた。

F₄世代においては4系統群をそのまま維持する形で各群から1系統ずつ選抜された。

F₅世代において生産力検定予備試験に供されたが未曾有の凍霜害のため、F₆で再検討されるとともに、4系統中3系統はそれぞれ葉系28, 29, 30として県内各地において適応性の検定が行なわれた。この結果、3系統とも早生で収量が多く、従来の品種よりすぐれていたが、なかでもとくに草型のすぐれていた葉系28を関東二条2号と命名し、生産力検定試験に供するとともに関係都府県に配付して地方適否を検討することとした。

F₆~F₁₀世代においては小型製麦試験機による麦芽品質の検定が行なわれた。

1969年ビール麦限定契約種となった時の世代

はF₆である。

Ⅲ 関東二条2号の特性

形態的特性： 関東二条2号の特性を栃木ゴールデンメロンと比較して示したものが第3表および第4表である。

これによると、関東二条2号の叢性・穂型・穂の下垂度などは比較品種と変わらないが、葉鞘の着色・葉鞘の蠟質物の多少はやや淡い。また芒の開閉を除いた芒および葉の諸特性は同じである。しかし、比較品種にくらべて芒は開いていて、株がよく閉じている点で非常に異なっている。

稈長は比較品種より約20cm低く、倒伏しにくい。穂はやや短かいが粒着が密なので一穂粒数は変らない。穂数は比較品種にくらべてやや少ない、粒型・粒大とも比較品種と同じであるが1ℓ重および千粒重はともに重い。

生態的特性： 関東二条2号の茎立ちは比較品種と同じかやや早い程度で凍霜害に対しては安定している。また、耐寒性は現在作られてい

第4表 関東二条2号の特性(2)

品 種 名	叢 性	穂 型	穂 の 下垂度	葉鞘の 着 色	葉 耳 の 着 色	芒 色	芒 の 開 閉	芒 の 粗 滑	葉鞘の 蠟 質 物	葉 の 広 狭	株 の 開 閉
関東二条2号	中間	矢羽根	直	中	やや淡	やや濃	開	やや粗	多	中	閉
栃木ゴールデンメロン	中間	矢羽根	直	やや濃	やや淡	やや濃	中	やや粗	極多	中	やや閉
スワンハルス	中間	矢羽根	垂	やや濃	中	中	やや閉	やや粗	多	中	中

注. 育成地における'59~'64年の平均

第5表 関東二条2号の特性(3)

品 種 名	縞 萎 縮 病			株 腐 病 (南河内)	赤 か び 病		白 粉 病 (南河内)	苦 土 欠 抵 抗 性 (南河内)	磷 欠 抵 抗 性 (茨 城)	強 稈 性 (埼 玉)
	(栃木)	(愛媛)	(山口)		高 知	鹿 屋				
関東二条2号	弱	強	弱	やや弱	2.1.1	0.5.4	中	やや強	中	中
栃木ゴールデンメロン	弱	強	弱	中	1.0.6	5.5.6	弱	中	やや強	弱
スワンハルス	やや弱	中~強	弱	中	1.5.7	3.5.0	中	中	やや弱	弱

注. '62~'65の成績から判定した。()内は試験実施場所

* 罹病粒率 **被害率

る醸造用品種のなかでもっとも強いといわれているゴールデンメロン系品種と同程度で、これらの品種を栽培している地帯でも充分越冬する。

関東二条2号の熟期は比較品種より4日早い穂発芽性は比較品種と同程度である。

なお、特性検定試験の成績は第5表に示すとおりである。これによると白渋病耐病性、強稈性についてはかなり改善されているが、縞萎縮病、株腐病、赤カビ病などの耐病性および燐欠抵抗性については比較品種と同程度かやや弱く改善されていない。

品質：原麦の品質についてみると整粒歩合は供試11年中9カ年、関東二条2号が比較品種を上まわり、平均で68%高い値を示している。さらに、年次間の変動も比較品種より少なく安定している。これは比較品種が長稈で倒伏しやすく、また晩熟のため登熟障害を起しやすいのに反し、関東二条2号は短稈で倒伏しにくく、かつ熟期の早まっていることが有利に働いていると考えられる。

穀皮歩合は同程度かやや薄い。粗蛋白質含量は同程度である。

第6表 品質調査成績

品 種 名	年 次	原 麦			芽						
		整粒歩合 (%)*	穀皮歩合 (%)	粗蛋白質含量 (%)	エキス (%)	エキス差 (%)	可溶性窒素	コーンバツハ数	色 度	粗蛋白質含量 (%)	酵素力 (°WK)
関東二条2号	1958	77.1	7.8	10.2							
	1959	47.9	5.7	12.3							
	1960	69.4	7.2	12.5							
	1961	59.4	8.3	11.4							
	1962	72.1	8.6	14.0							
	1963	93.3	7.5	13.3							
	1964	71.9	8.2	13.4	77.3	0.5	76.2	36.7	2.2	12.9	330
	1965	82.4	—	12.5	77.3	1.0	—	—	2.2	11.4	316
	1966	85.2	—	13.0	77.6	2.7	80.0	38.5	1.9	13.0	314
	1967	91.5	7.8	12.0	78.1	2.2	78.1	33.7	2.2	12.2	304
	1968	46.5	8.9	11.0	81.7	0.6	64.2	33.8	1.7	10.6	243
平均	72.4	7.8	12.3	78.4	1.4	74.6	35.7	2.0	12.0	301	
栃木ゴールデンメロン	1958	91.7	8.5	11.1							
	1959	17.0	7.4	12.7							
	1960	57.6	7.6	11.7							
	1961	40.4	8.6	11.9							
	1962	47.7	9.5	15.4							
	1963	93.0	7.9	12.7							
	1964	58.7	9.3	13.1	76.7	0.8	85.7	40.8	2.3	12.5	336
	1965	79.4	—	11.5	77.0	1.3	—	—	2.4	11.2	324
	1966	78.6	—	13.7	77.3	1.7	90.9	43.7	2.0	13.0	391
	1967	91.9	7.7	13.5	77.8	3.3	83.5	30.9	2.0	13.0	310
	1968	65.5	8.5	11.3	79.4	0.4	67.4	33.6	1.8	11.2	272
平均	65.6	8.3	12.6	77.6	1.5	81.9	37.3	2.1	12.2	327	

注、* 2.5mm以上(以下同じ)

このように原麦については関東二条2号は比較品種よりむしろすぐれた成績を示している。

つぎに少量麦芽製造による麦芽特性についてみるとエキス差、色度、粗蛋白質含量などは比較品種と同程度である。可溶性窒素、コールパ
ッハ数はやや低いので比較品種よりややとけにくいようである。しかし、もっとも重視されるエキスについては比較品種が77.6%に対して関東二条2号は78.4%で比較品種よりまさるとも劣らないものと考えられる。また、酵素力は比

較品種よりやや低いが、さきに新品種となったニューゴールデンよりは高く実際の醸造において問題はない。

IV 収量および適応地域

育成地における収量成績は第7表に示されている。標準肥栽培における関東二条2号の11カ年の平均収量はa当り38.8kgで比較品種にくらべて13%増収している。また、整粒重(25mm以上の粒重)は子実重の場合より、さらに両品種

第7表 育成地における収量成績

品種名	年次	標準肥栽培				多肥栽培				ドリル播栽培			
		子実重		整粒重*		子実重		整粒重*		子実重		整粒重*	
		a当 (kg)	比率	a当 (kg)	比率								
関東 二条 2号	1958	39.7	104	30.6	88								
	1959	49.1	210	23.5	58.8								
	1960	36.6	106	25.4	128	41.3	110	29.4	153				
	1961	46.4	120	27.6	176	44.6	116	20.9	158				
	1962	36.0	153	26.0	232					47.0	168	40.3	249
	1963	45.9	101	42.8	101					40.1	100	36.3	98
	1964	28.7	99	20.6	121					29.2	83	18.1	99
	1965	36.8	90	30.3	93								
	1966	47.6	124	40.6	134								
	1967	31.4	87	28.7	87	38.3	109	30.9	131				
	1968	28.6	101	13.3	72	33.4	111	16.3	84	28.7	110	16.2	79
平均	38.8	113	28.1	119	39.4	112	24.4	129	36.3	112	27.7	120	
栃木 ゴ ール デ ン メ ロ ン	1958	38.1	100	34.9	100								
	1959	23.4	100	4.0	100								
	1960	34.5	100	19.9	100	37.5	100	19.2	100				
	1961	38.8	100	15.7	100	38.6	100	13.2	100				
	1962	23.5	100	11.2	100					28.0	100	16.2	100
	1963	45.4	100	42.2	100					40.2	100	36.9	100
	1964	29.0	100	17.0	100					35.2	100	18.2	100
	1965	41.0	100	32.6	100								
	1966	38.4	100	30.2	100								
	1967	35.9	100	33.0	100	35.0	100	23.6	100				
	1968	28.3	100	18.5	100	30.1	100	19.4	100	26.0	100	20.5	100
平均	34.2	100	23.6	100	35.3	100	18.9	100	32.4	100	23.0	100	

注. 播種期 10月25日、多肥栽培は標準肥の50%増

*は 子実重×2.5mm以上の選粒歩合である(以下同じ)。

の差が明瞭に認められ、関東二条2号の整粒重が28.1 kgに対して比較品種では23.6 kgであり、その増収率は19%となる。また、比較品種の11カ年の整粒重はa当り40kg～42.2kgと巾広く分

布しているのに対して関東二条2号では13.3kg～42.8kgで年次の変動がやや小さい。このように比較品種より関東二条2号は多収でかつ安定した収量がえられている。

第8表 育種地帯別成績

場所	品種名	出穂期 (月・日)	成熟期 (月・日)	稈長 (cm)	穂長 (cm)	m ² 当 穂数 (本)	子実重		ℓ重 (g)	千粒重 (g)	整粒 歩合 (%)	粗蛋白 含量 (%)
							a当(kg)	比率				
I 地帯	関東二条2号	4・28	6・6	88	6.0	460	37.9	107	644	4.16	76.3	12.3
	比較品種	5・6	6・11	107	6.7	464	35.4	100	636	3.86	68.7	12.7
II 地帯	関東二条2号	4・29	6・3	93	6.4	343	30.2	109	621	4.22	85.1	12.1
	比較品種	5・3	6・5	104	6.6	343	27.8	100	608	3.94	68.5	13.7
III 地帯	関東二条2号	4・27	6・1	92	7.0	376	20.4	97	596	3.64	68.0	12.6
	比較品種	5・1	6・4	102	7.3	364	21.0	100	529	3.72	70.5	11.9
IV 地帯	関東二条2号	4・23	5・28	95	7.1	296	21.7	100	601	4.01	77.0	12.9
	比較品種	4・14	5・21	102	6.7	238	21.7	100	630	4.19	88.1	14.5

注、標準栽培の成績である(1961および1962年度)

I 地帯：宮城、福島、茨城、栃木、群馬、埼玉、千葉、東京、山梨、長野

II 地帯：滋賀、京都、鳥取、島根、福井

III 地帯：神奈川、奈良、大阪、兵庫、岡山、山口、福岡、佐賀、熊本、愛媛

IV 地帯：宮崎、鹿児島

第9表 兵庫県農試における成績

品種名	年次	出穂期 (月・日)	成熟期 (月・日)	稈長 (cm)	穂長 (cm)	m ² 当穂数 (本)	子実重		倒伏 程度
							a当(kg)	比率	
関東二条2号	1961	4・25	6・4	92	7.2	429	4.10	116	ム～ビ
	1962	5・4	6・7	93	7.3	423	1.97	123	ビ～多
	1963	4・20	5・24	86	6.0	520	4.39	150	少中～中
	1964	5・2	6・5	92	6.0	432	4.13	123	ビ少～少
	1965	4・29	6・2	82	6.1	242	1.99	123	ビ
	1966	4・25	5・29	97	6.0	522	4.25	124	ビ
	1967	4・19	5・30	104	6.7	554	4.24	118	中～多
	1968	4・24	5・29	98	6.5	403	4.04	131	少
	平均	4・26	6・1	93	6.5	441	3.64	126	
スワンハルス	1961	4・28	6・6	120	8.4	373	3.53	100	多
	1962	5・11	6・10	108	8.8	372	1.60	100	多
	1963	4・22	5・25	96	7.3	505	2.93	100	甚～中多
	1964	5・7	6・7	111	7.4	420	3.37	100	多甚～多
	1965	5・4	6・6	84	7.6	224	1.62	100	少～中
	1966	4・29	5・31	109	7.0	479	3.44	100	中～中多
	1967	4・28	6・5	113	7.2	563	3.58	100	甚
	1968	4・27	6・1	110	7.8	401	3.08	100	多
	平均	5・1	6・4	106	7.7	417	2.89	100	

つぎに異なる栽培条件下における成績についてみると比較品種では多肥条件下の子実重は標肥下のそれにくらべて減少しているのに反し、関東二条2号ではやや増収している。整粒重についても同様である。これは比較品種では増肥すると子実重が減少し、そのうえ整粒歩合が非常に低下するのに対して、関東二条2号では子

実重は増加し、整粒歩合があまり低下しないことによるものと考えられる。

関東二条2号は39試験地に配付され、地方適否が検討されたが、これを育種地帯別にまとめてみると第8表のとおりである。すなわち、関東二条2号はⅠ地帯およびⅡ地帯の大部分の試験地では多収を示したがⅢ地帯およびⅣ地帯で

第10表 滋賀県農試における成績

品 種 名	年 次	出穂期 (月日)	成熟期 (月日)	稈 長 (cm)	穂 長 (cm)	m ² 当穂数 (本)	子 実 重		倒 伏 程 度
							a当(kg)	比 率	
関東二条2号	1961	4・22	6・2	87	8.3	210	29.4	100	ビ
	1962	4・24	5・29	98	6.5	477	33.6	138	中
	1963	4・20	5・31	85	6.2	354	29.0	102	ビ
	1964	5・6	6・9	92	6.5	597	32.7	126	少
	1965	4・27	6・4	89	5.7	346	34.1	132	少
	1966	5・2	6・4	90	6.7	304	32.5	100	ム
	1967	4・29	6・4	100	6.7	412	37.7	107	ビ
	1968	4・22	5・27	112	6.3	638	56.3	115	中
	平均	4・27	6・2	94	6.6	417	35.7	113	
滋 賀 中 生	1961	4・24	6・1	108	7.4	185	29.5	100	中
	1962	4・29	6・4	113	7.8	433	24.2	100	中
	1963	4・19	5・30	95	6.7	486	29.5	100	多
	1964	5・6	6・10	108	7.3	334	26.0	100	多
	1965	4・27	6・2	108	6.9	354	25.8	100	多
	1966	5・2	6・5	111	7.6	372	32.6	100	ム
	1967	5・4	6・9	118	7.3	385	35.2	100	少
	1968	4・24	6・11	127	7.9	598	48.9	100	甚
	平均	4・28	6・5	111	7.4	393	31.5	100	

第11表 広島県農試における成績

品 種 名	年 次	出穂期 (月日)	成熟期 (月日)	稈 長 (cm)	穂 長 (cm)	m ² 当穂数 (本)	子 実 重		倒 伏 程 度
							a当(kg)	比 率	
関東二条2号	1962	4・29	6・5	79	6.4	435	22.8	106	ム～ビ
	1963	4・21	5・27	74	6.6	141	18.0	103	ム
	1964	5・4	6・8	93	6.2	403	40.5	110	ビ
	1965	4・28	6・3	78	5.6	275	18.5	101	ム～ビ
	平均	4・28	6・3	81	6.2	314	25.0	106	
交 A	1962	4・30	6・3	81	6.3	525	21.6	100	多～甚
	1963	4・22	5・27	76	6.4	157	17.4	100	ム
	1964	5・8	6・10	104	6.4	400	36.9	100	多
	1965	5・1	6・4	83	6.0	307	18.3	100	少～中
	平均	4・30	6・3	86	6.3	347	23.6	100	

は同程度がやや少収であった。また、出穂期は比較品種にくらべてⅠⅡおよびⅢ地帯では8～4日早く、成熟期で5～2日早く、Ⅳ地帯では7日以上遅れている。

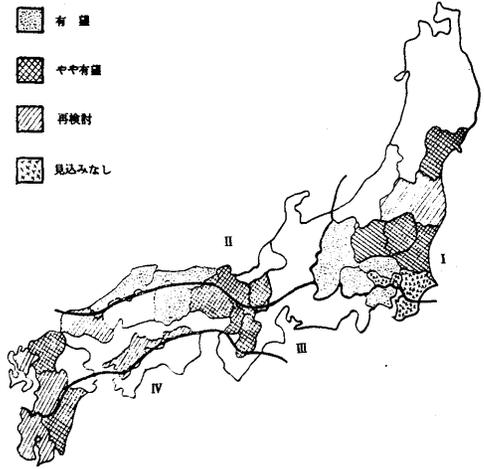
稈長および穂長についてはいずれの地帯でも短い。ℓ重、千粒重、整粒歩合はⅠⅡⅢ地帯では同程度かややすぐれているがⅣ地帯のそれはやや劣っている。

限定品種として採用されている3県の成績は第9～11表に示されている通りである。

表にみられるように3県とも熟期、稈長、倒伏抵抗性および子実重などは比較品種にくらべて、関東二条2号がすぐれている。

以上のことの要約は各県における関東二条2号に対する有望度によってもっともよく表わされているように思われるので、それを図示すると第3図のようになる。

これによるとⅠおよびⅡ地帯で2県を除き他は有望あるいはやや有望で、Ⅲ地帯およびⅣ地



第3図 関東二条2号の有望度の分布

(1961, 1962年度)

注 I 地帯の比較品種は栃木ゴールデンモロン、関東晩生ゴール、キリン産1号
 II " 交A、スワンハルス、栃木ゴールデンモロン
 III " 交A、スワンハルス、博多2号、関東晩生ゴール
 IV " アサヒ5号、アサヒ19号である。

年次	世代	育成担当者
1950(昭25)	交配	日本・朝日大麦研究班
1951("26)	F ₁	"
1952("27)	F ₂	"
1953("28)	F ₃	"
1954("29)	F ₄	中山 保、斎藤忠男
1955("30)	F ₅	中山 保、北条良夫、斎藤忠男
1956("31)	F ₆	中山 保、北条良夫、斎藤忠男
1957("32)	F ₇	中山 保、北条良夫、斎藤忠男、藤平利夫、山野昌敏
1958("33)	F ₈	中山 保、北条良夫、藤平利夫、沢畑 秀、山野昌敏、川口教美
1959("34)	F ₉	中山 保、増田澄夫、川口教美、山野昌敏
1960("35)	F ₁₀	中山 保、増田澄夫、川口教美、山野昌敏
1961("36)	F ₁₁	中山 保、増田澄夫、川口教美、山野昌敏、米内貞夫
1962("37)	F ₁₂	中山 保、増田澄夫、川口教美、山野昌敏、米内貞夫
1963("38)	F ₁₃	中山 保、増田澄夫、川口教美
1964("39)	F ₁₄	中山 保、増田澄夫、川口教美
1965("40)	F ₁₅	増田澄夫、中山 保、川口教美
1966("41)	F ₁₆	増田澄夫、中山 保、川口教美、山野昌敏
1967("42)	F ₁₇	野中舜二、増田澄夫、川口教美、山野昌敏、横倉光昭
1968("43)	F ₁₈	野中舜二、川口教美、山野昌敏、粕谷光正、横倉光昭

帯ではやや有望と再検討が相半ばしている。これをニューゴールデンの場合にくらべるとⅠⅡ地帯ではニューゴールデン、ⅢⅣ地帯では関東二条2号を有望視する県が多く、この結果、ⅠⅡ地帯の各県では関東二条2号をやめてニューゴールデンを採用した。

また、その後農業情勢がかわり、とくに早熟強稈品種が望まれるようになり、当场からもこの頃関東二条2号よりさらに早熟強稈系統を配付するようになり、上記3県以外では関東二条2号を中止したように考えられる。

栽培上の注意点： 関東二条2号は栃木ゴールデンメロンあるいはスワンハルスにくらべて短稈で倒れにくいからといって多肥にすぎると細実がふえるうえに粗蛋白質含量が上り、醸造用原料麦として品質を落すので極端な多肥栽培はさけること。

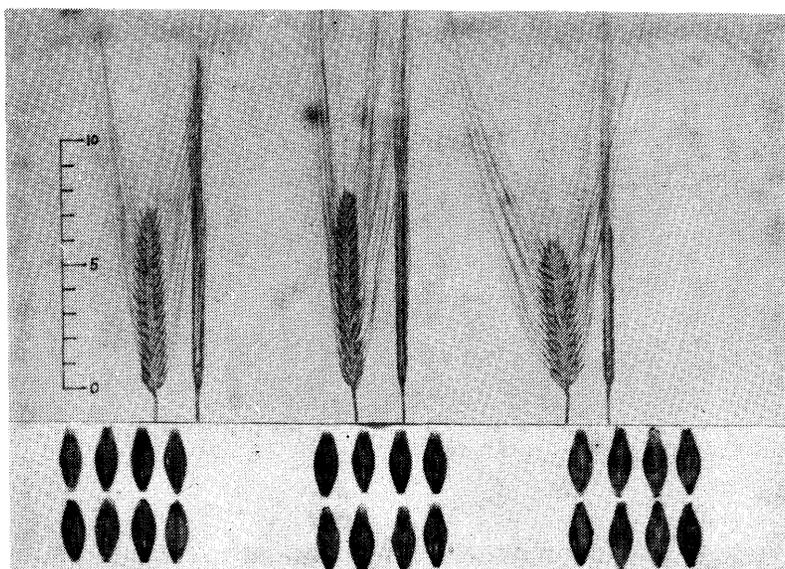
V 摘 要

1 わが国における麦の主要品種であるゴールデンメロン系およびスワンハルス系品種の早生、短稈化を目標として1950年に日本・朝日大

麦研究班において「交1-18×京都中生」の交配が行なわれ、1954年(F₂)から栃木県農業試験場薬師寺分場(現南河内分場)において選抜固定がはかられてきたが、この中から新限定契約品種関東二条2号が育成された。

2 関東二条2号はゴールデンメロン系品種にくらべ、熟期は約4日早く、稈長は約20cm低い。穂はやや短かいが着粒が密なので一穂粒数は変らない。穂数は比較品種にくらべてやや少ない。粒型・粒大とも比較品種と同じであるが1ℓ重および千粒重はともに重く多収である。品質はゴールデンメロン系品種と同等かややまざっている。

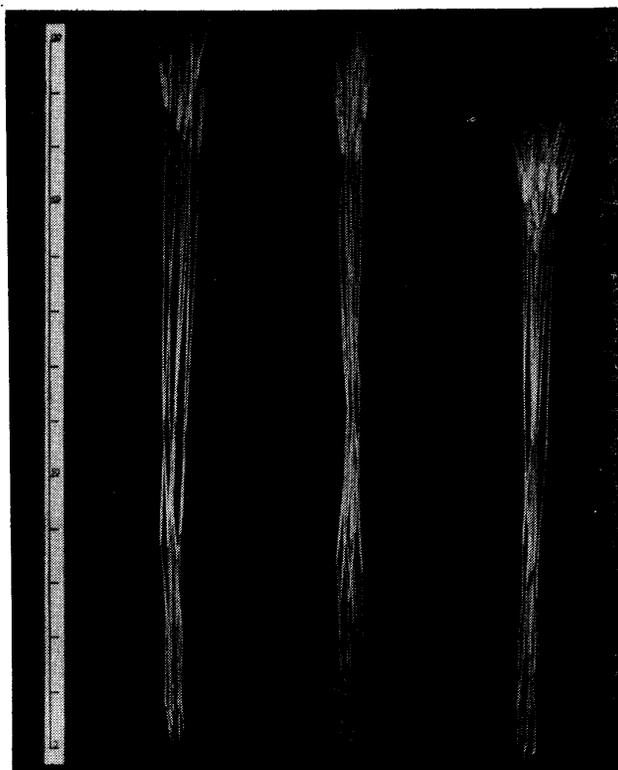
3 関東二条2号は、兵庫県、滋賀県、および広島県で契約指定品種以外の品種に採用され、普及に移され、いわゆるその他品種(正式契約種より加算金が安い)として醸造会社と契約して栽培を続けた。その後、このような形で数年間実際醸造に供された結果従来の契約品種と醸造特性のわからないことが明らかとなり、醸造会社は1969年に関東二条2号を限定契約品種として認めることとなった。



栃木ゴールデンメロン
（比較品種）

スワンハルス
（比較品種）

関東二条2号
（限定契約品種）



栃木ゴールデンメロン
（比較品種）

スワンハルス
（比較品種）

関東二条2号
（限定契約品種）